

アジア若手による研究

武藤俊介

Shunske Muto

名古屋大学大学院工学研究科

キーワード：アジア，若手研究者，電子顕微鏡

日本顕微鏡学会学術講演会ではこの数年アジア若手と題して、東アジア地域の電子顕微鏡を用いて研究を行っている若手研究者を招聘してご自身の研究紹介をしていただく試みが続いている。この中には既に欧米または日本の研究室で博士課程学生やポスドクを経験した方を含め、中国、韓国、台湾、タイ、マレーシア等の東アジア各国から推薦された若手の研究者たちが英語でプレゼンテーション、討論を行うというものである。

電子顕微鏡分野のみならず科学技術の幅広い分野において、今や日本は欧米に肩を並べる水準にあることは間違いないだろう。しかし一部の先進国を除いて、この地域には丁度戦後の日本のように今後急速な勢いで科学技術を学び発展して行く国々が多数存在している。そのような国々の若い人材が目指すお手本が、最早欧米諸国だけではなく、第一に近隣先進国の日本であって欲しいと願うものである。また電子顕微鏡分野に話を限っても、日本のこの分野におけるハード・ソフト両面の長年にわたる蓄積は、アジア地域の底上げと活性化に大きく寄与することは疑い余地はなく、我が国がリーダーシップをとって欧米に対抗する独自路線をも開拓していくことは、科学技術の発展のためだけでなく国家戦略の観点からも重要であると考えられる。

更に少子高齢化などの問題を抱えたある意味では成熟した社会環境を迎えつつある日本において、この高度に組織化された社会システムを維持し、豊かな生活を続けながらも地球温暖化や天然資源の枯渇に対する代替エネルギー源などへの解決法を見いだしていくためには、優秀な人材供給源を確保し続けなくてはならない。この意味においても、日本の教育及び人材育成システム見直しの一環として、東アジア地区の多くの若い人材を日本に引きつけることも必要であろう。

記録によると2009年の学術講演会まで既に10名程度のアジア若手研究者が登壇されたことと思うが、諸般の事情で、必ずしも会員の多くがこれらの方々の仕事を目に触れることなくいるのではないだろうか。また2010年5月の第66回学術講演会（名古屋）でも同様のシンポジウムが計画されている。そのためこれらを一歩でも良いから文書の形で残しておくことが重要と考えこの特集を提案させていただいた。国のバランスを考えて原稿の依頼を行ったが、ページ制限のために、最終的に4名の材料系若手研究者の方にお引き受けいただいた。

特筆したいことは、原稿依頼した殆どの方に快く執筆を引き受けていただけたことである。和文誌の性格上、頂いた英文ドラフトを和訳して掲載する旨を説明した上で原稿依頼を

行ったが、このことは科学分野の共通語である英語ではなく、日本語を理解する（主として日本人）コミュニティーのみに向けた執筆をして頂くことに他ならず、果たしてこれを受けて頂けるかという懸念もあった。このことはこの分野の東アジア各国の方々は日本の顕微鏡学会を重視していることの証左であり、本小文の主旨とも合致している。

原著の英語論文の日本語訳を掲載することについて、いささかの説明が必要かも知れない。これについては理事会および編集委員会内部での議論を経て決定した。理事会では英文のまま掲載しても良いのではないかという意見が大勢を占めたのだが、実際作業に当たる現場から見ると、どの程度のレベルの英文が集まるかという懸念、英文を校正することの手間などもあるが、むしろ上記の主旨に照らして、日本語でその研究内容が広く読まれることで、例えば本国あるいは我が国での就職活動などの際にむしろ将来執筆者の利益になって欲しいという考えのもとで日本語への翻訳を敢行した。

原論文の閲読及び下訳を武藤が行い、その日本語原稿を編集委員で手分けして原文と照らし合わせながら表現などを校閲、より自然な日本語へ修正するという作業を行った。実際に集まった原稿を見ると、英文に関しても平均的な日本人若手研究者の英文と全く引けをとらないばかりか、むしろ質の高さに驚きを隠せなかったほどである。原稿締め切りをきちんと守って頂いたこともここに言及しておきたい。また主要著者の国籍が多様化するように執筆者の選択を行ったのだが、奇しくも内容に関しても非常に幅広い分野の原稿が集まったことは喜ばしい限りである。しばしば専門的にかなり高度な内容も含まれているので、日本語訳したことにより、広く日本の若手・中堅研究者にも読みやすくなり、我が国の学生・若手研究者がこれらを新たな刺激としてこれらを受け取って頂き、この分野の東アジア地域における国際交流およびその発展に少しでも貢献できれば編集委員会としては望外の喜びである。

IMCをはじめ電子顕微鏡関連の国際学会はいまだに欧米主導であり（特に収差補正技術の出現以降その傾向はむしろ促進されている感が否めないが）、本和文誌に掲載される米国M&MやEUREMなどの会議報告などでも、しばしば「世界の最先端の情報を得るためには重要な会議で是非出席すべき…」云々の論調が見られる。このこと自体を否定するつもりは毛頭ないが、いつの日か欧米の顕微鏡学会誌において、日本顕微鏡学会学術講演会やAPMが同様な論調で語られることを望んでやまない。